

NTTの光3000万加入とNGNの実現に向けて

NTTは2010年までに光加入者を3000万回線とすることと、次世代ネットワーク(NGN)の2008年サービス開始を目指して、着々と準備を進めているが、今年はその実現が可能かどうかを占う大変重要な年である。

NTT東日本およびNTT西日本のBフレッツは、2006年9月末で472万回線となっており、毎月20万回線以上の増加が見込まれていることから、2006年度末には600万回線を超えることは確実である。2006年度の純増数は約300万回線であるが、2010年度3000万加入を達成するには、純増数を毎年100万回線上乗せしなければならないので、2007年度は400万回線の純増が必要である。

NGNは、IP技術を駆使したIP統合網であり、これまでのIP網に見られるベストエフォートではなくエンド-エンドでの品質を保証し、従来の電話網と同等の信頼性、安定性を確保し、従来の電話網を完全に置き換えると同時に、高速インターネット接続による多チャンネル・高画質の動画配信を可能とするネットワークである。NGNは国際機関であるITU-Tで国際勧告化された通信ネットワークであり、欧米でも開発が進められていて、いわば国際間の開発競争の対象となっている。

NTTは昨年12月20日に、NGNのフィールド・トライアルを東京都内と大阪市内のショールーム2カ所で開始したが、本年1月にはNTTグループ社員

の自宅におけるトライアルを開始し、春には、一般から募る1000人程度に規模を拡大する計画である。来年には本格サービスに移行する予定であり、その意味で今年は極めて重要な年である。

なお、NGNは国内においては、NTTが他の通信事業者完全に先行しており、総務省はライバル事業者やコンテンツ事業者などの利用を促すため、技術情報や通信網貸し出しなどの面で包括的な解放をNTTに義務づけたいとしており、この点での議論も今年の焦点になる。果たしてNTTの企業としての自由度をどこまで認めるのか、国際競争力の観点も含めて、誤りのない結論を導くことが必要である。

実は、NTTはすでにIP電話を「ひかり電話」として、光ブロードバンドサービス「Bフレッツ」とセットで販売を進めている。この「ひかり電話」は、すでに利用している加入電話などの電話番号も電話機もそのまま利用でき、110番や119番などの緊急通報も可能で、キャッチホンなどの付加サービスも使用でき、通話料は全国一律3分8.4円と格安である。基本料も一般加入電話が月額1,785円であるのに対して525円と3分の1以下である。もともと「Bフレッツ」の基本料が別に月額5,200円加わるので、ブロードバンドを利用しない人には高くつくが、もともと「Bフレッツ」を利用している人にとっては、大変有難いサービス

である。このため、加入者が急速に増加しており、NTT東日本、NTT西日本ともに80万以上の加入者を獲得している。

ところが、昨年9月から10月にかけて、NTT東日本、NTT西日本で相次いで通信障害が発生した。NTT東日本では、昨年9月19日から21日の3日間、電話が繋がりにくくなる障害が発生した。原因は法人向けのひかり電話の発着信を制御するサーバのソフトウェアの欠陥などであった。また、NTT西日本では、10月23日から25日まで断続的に電話が繋がりにくい状態が続いた。原因はサーバの容量不足であった。

こうした故障の再発は、「ひかり電話」の信頼を大きく損なうことになり、更にはNGNに対する不安感を助長することにもなりかねない。以前と違って、技術進歩の激しい今日では、サービス開始前にじっくり試験を繰り返す時間がないため、走りながら対策を立てざるを得ない面はあるが、トラブルの再発防止に向けて、各種シミュレーションによるソフトウェアの不具合の早期発見や習熟した技術者の育成などに全力をあげて取り組む必要がある。

とりわけ、NGNでこうしたトラブルを起こすことは絶対に避けるべきであり、その意味でトライアルを実施する本年はまことに意義深い年である。